# 2015年度 名古屋大学 前期 国語

## 一 評論

| 難易度 | 所要時間 | 出典 | 傾向と対策 |
|---|---|---|---|
| ★★★☆☆ | 45分 | 大久保孝治「現代社会と自由時間」からの出題。著者は1954年、東京生まれ。現在早稲田大学文化構想学部教授。専門はライフストーリー研究。特に近代社会の変動に伴う「人生の物語」（生き方についての社会規範）の変容を主として研究している。 | 名古屋大学の現代文の問題は基本的な問題が多いが、本文の分量が多めなので素早く読んで理解する力が求められる。また、記述式の問題には字数制限があるので、関係ないことを詰め込み過ぎず要点を押さえるようにしたい。本問の問三・問四のように、傍線部のだいぶ後ろまで読まないと解答できない問題もあるので、前から順番に解くことにこだわらず、できる問題から解くようにしよう。 |

**解答**

**問一** a 過剰 b トナ c サクシュ d オ e 無為
f 埋没 g 担保 h ジュンポウ i クヤ j 不可逆

**問二** A イ B サ C ウ D コ E コ F ウ G オ

**問三** 時間という指標を守ることで、産業社会において個人の時間と集団の時間を同調させ、別々の場所での活動を円滑に進めることができ、自由と平等を理念とする近代社会においては平等に与えられた社会資源である時間の使い方が重要だから。（109字）

**問四** システムに対する個人の自立性の発揮のために、制度のなかで強制されている活動を一時的に停止して心身の疲労を回復させ、歪んでしまっている時間志向を補正するような、システムの要請によらない活動をするべき。（99字）

**問五** ちっともやすまず いきをもつかずに

**問六** 人間は本来、未来志向・現在志向・過去志向を併せ持っているが、変化する社会経済的状況のなかでその時間志向が変形していずれかに偏り、バランスを失ってしまうこと。（78字）

**本文解説**

**段落解説**

**Ⅰ 時間にかかわる二つの規範（第1・第2段落）**

数ある規範のなかでも時間にかかわる規範は重要である。われわれは「時間を守れ」、「時間を無駄にするな」と言われ続けてきたが、それぞれにおける「時間」の意味は異なる。

**Ⅱ 目盛としての時間（第3～第6段落）**

時間にかかわる規範のうち「時間を守れ」というときの時間は目盛としての時間である。われわれは、共通の時間の目盛の下で、別々の場所で活動し

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

ている。例えば労働市場においては、それは分業という形で現れる。分業的な労働が円滑に行われるためには、各自が「時間を守る」必要がある。同様に、家族や会社や学校や仲間といった集団において、個人の時間と集団の時間の同調性が必要となる。

通常、個人は複数の集団に所属しているから、特定の集団への過剰な同調は他の集団への非同調という問題を生むだろう。「時間を守れ」という規範の背後には、どの集団の時間を優先する（＝「時間を守る」）のかという問題が存在している。近代の産業社会においては人々が生産中心的な思考をするので、産業活動の主要な担い手である会社や労働力の養成機関として見られる学校の時間が優先され、家族や個人の時間は軽んじられることになる。

**Ⅲ　社会的資源としての時間（第7～第11段落）**

「時間を無駄にするな」というときの「時間」は、社会的資源としての時間である。お金などの他の多くの社会的資源と異なり、時間はその所有量において個人差がない。だから、時間の大切さを唱えることは平等な社会というわれわれの理念に抵触しないのである。

しかし、お金や権力といった社会的資源の配分が不平等であるために、富者や強者は貧者や弱者から彼らが所有する時間を購入したり剥奪したりできる。購入は一見合理的だが、買い手市場のときは貧者や弱者の時間は安く買いたたかれることになる。すなわち時間の搾取である。

「自由時間」とは、自由に使用できる資源としての時間という意味である。自分の所有する時間という社会的資源をどのように使うかについての自由は、職業選択の自由や配偶者選択の自由に負けず劣らず重要な自由である。この時間についての自由がそれらの自由に影響を及ぼすこともある。

自由時間とはいっても、それは規範のシステムとしての制度の外部にあるものではなく、「自由に使ってよい」時間として制度的に認められたものである。現実の社会生活のレベルで考えると、問題は制度的に認められた自由時間の中に権力が介入してくることである。この介入の背景には自由時間を無為に過ごしてしまうことへの懸念があるのだろう。「時間を無駄にするな」という規範は自由時間についても適用されるのである。

**Ⅳ　自由時間にするべきことその一、「休む」（第12～第16段落）**

この権力の介入にどう対抗するかという視点から、自由時間に何をするべきか論じることには意味があるだろう。自由時間にするべきことの第一は、制度の中で強制されている活動を一時的に停止することである。これにより心身の疲労が回復するうえ、社会システムへの従属状態から一時的に距離をとること、すなわち「休む」ことができる。「休む」ことは、人間は機械とは違うのだということを確認し、機械の歯車としてシステムに組み込まれ埋没してしまうことを拒否することである。

しかし、「休む」ことは周囲の視線を考えると決して楽なことではない。だからこそ、そのような「休む」には決意がいるというわれわれの社会の現状を変えるために、そしてシステムに対する個人の自律性を担保するために、決然として「休む」ことが大切なのである。

**Ⅴ　自由時間にするべきことその二、自分の時間志向を補正するような活動をする（第17～第21段落）**

決然として「休む」として、制度的に強制されている活動を一時的に停止すること自体は本来制度的に要請されていることであるから、実質的には現状に対する抵抗であるとはいえ、形式的には遵法的な行為である。だから、ただ「休む」（＝活動停止）だけでは、システムに対する個人の自立性の発

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

揮としては弱いだろう。「休む」ことに加えて、システムが要請しているわけではないが、自分がやりたいからするという何らかの活動をすることで、自由時間は名実ともに個人に所属するものとなるだろう。

その活動は何でもよいが、歪んでしまっている時間志向を補正するものであることが肝要である。人間は本質的に将来に希望や不安を抱いてその実現や回避のために努力したり（未来志向）、いま目の前で起こっている事態に一喜一憂したり（現在志向）、過ぎ去った出来事を懐かしんだり悔やんだりする（過去志向）ものである。そうやって時間軸の上を行ったり来たりしながら生きている。

しかし、経済が右肩上がりの時代には過度の未来志向が広まり、経済が右肩下がりの時代に入ると、刹那主義的な現在志向や懐旧主義的な過去志向などが広まる。このようにわれわれの時間志向は変化する社会経済的状況のなかで変形し、バランスを失いがちである。こうしたアンバランスを補正するための活動こそ、自由時間に行うにふさわしいものである。まずは自分の時間志向のありようを反省してみて、そのバランスを回復するにはどうしたらよいかを考えることから始めてみるとよいだろう。

**百字要旨**

自由時間には、システムに対する個人の自立性の発揮のために、制度のなかで強制されている活動を一時的に停止し、加えてシステムの要請によらない活動をするべきで、その内容は歪んだ時間志向を補正するものがよい。

（100字）

**用語解説**

―出典：『広辞苑　第六版』（岩波書店）（ただし、※のついた語義は解説執筆者による）

**規範**　①のり。てほん。模範。
②のっとるべき規則。判断・評価または行為などの拠るべき手本・基準。

**買い手市場**　※商品の供給が過多なことにより、あるいは需要が過少なことにより、買い手が売り手より有利な市場の状況。ここでは、貧者や弱者の時間を商品に例えている。

**アナーキー**　無政府状態。無秩序。

**形而上学**　①アリストテレスのいう第一哲学。哲学史・問題集・定義集・実体論・自然神学の五部から成る。
②現象を超越し、その背後に在るものの真の本質、存在の根本原理、存在そのものを純粋思惟により或いは直観によって探求しようとする学問。神・世界・霊魂などがその主要問題。

**メディア**　媒体。手段。特に、マス・コミュニケーションの媒体。

**隠喩法**　①あるものを別の物にたとえる語法一般。
②修辞法の一つ。たとえを用いながらも表面上にはそれ（「如し」「ようだ」等）を出さない方法。白髪を生じたことを「頭に霜を置く」という類。暗喩法。
③修辞法の一つ。あるものを表すのに、これと属性の類似するもので代置する技法。

**担保**　①債務の履行を確保するため債権者に提供されるもの。抵当権や保証の類。
②しちぐさ。抵当。ひきあて。
③不利益に備えてその補いとなるもの。

**刹那主義**　過去や将来を考えず、ただこの瞬間を充実すれば足りるとする考え方。

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

## 設問解説

**問一**

**解答** a 過剰 b トナ c サクシュ d オ e 無為
f 埋没 g 担保 h ジュンポウ i クヤ j 不可逆

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 知識・教養

**解説**

例年通り、日常的に目にする漢字の読み書き問題である。hのジュンポウなど、自分ではあまり口にしない語句もあるが、文章を読む中で少しでも引っかかる語句があれば調べるようにすることで対応できる。名古屋大学は他の大学と比べても漢字問題の数が多く、配点もその分高いと予想されるので、全問正解できるようにきちんと対策してほしい。

**問二**

**解答** A イ B サ C ウ D コ E コ F ウ G オ

**難易度** ★★☆☆☆

**設問パターン** 特殊型

**解答範囲** Ⅰ（第1・第2段落）

**解説**

Aは「目盛」に続くかっこの中に入る語である。選択肢のうち「目盛」の言い換えとして適するものは「指標」と「時刻」である。ここで直後の文において具体例として「時刻」が挙げられていることから、Aに入るものとして「時刻」はふさわしくないとわかる。よってAに入るのは「指標」である。

Bに入るものはBに続く「させる」と結びつくものでなければならない。選択肢のうちこの条件を満たすのは「優先」「同調」「交換」である。さらに、「言い換えれば」という接続詞に注目すると、「夕食の時間や門限といった指標を守る」ことと「各自の生活時間と家族の時間をBさせる」ことは同じだとわかる。先ほどの3つの語句の中でこの文脈に適するのは「同調」である。さらに、続く第5段落のはじめに「こうした個人の時間と集団の時間の同調性の必要は～」とあることからも「同調」が正しいと確認できる。

C～Gが含まれている第6段落は、どの集団の時間が上位に置かれてどの集団の時間が下位に置かれるかという話をしている。ここから、C～Gに入るものは「会社」「家族」「学校」という集団を表す語句に絞られる。このうち産業活動の主要な担い手は「会社」なのでCに入るのは「会社」である。労働力の養成機関としてふさわしいのは「学校」なのでDに入るのは「学校」である。EとFの関係は、Fの時間が一番優先的な地位を占めていて、Eの時間が二番目に優先的な地位を占めているというものである。第6段落3文目より、Cの時間が他の集団の時間よりも上位に置かれるので、Fに入るのはCと同じ「会社」であり、それに準じて優先されるEは「学校」である。軽んじられるとされるGに入るのは、「会社」でも「学校」でもない「家族」である。

以上より、Aイ（指標） Bサ（同調） Cウ（会社） Dコ（学校） Eコ（学校） Fウ（会社） Gオ（家族）である。

**問三**

**解答** 時間という指標を守ることで、産業社会において個人の時間と集団の時間を同調させ、別々の場所での活動を円滑に進めることができ、自由と平等を理念とする近代社会においては平等に与えられた社会資源である時間の使い方が重要だから。（109字）

**難易度** ★★★★☆

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

**設問パターン** 要約型＋理由補填型

**解答範囲** Ⅱ・Ⅲ（第３～第 11 段落）

解説

時間にかかわる規範は第１段落２文目で具体的に言い換えられている。これを使って傍線部を言い換えると、「『時間を守れ』という規範と『時間を無駄にするな』という規範は社会にかかわる規範なのである。」となる。そこで、『時間を守れ』という規範が社会の根幹にかかわるといえる理由と、『時間を無駄にするな』という規範が社会の根幹にかかわるといえる理由をそれぞれ答えればよい。形式としては理由補填型であるが、解答範囲が広く、要約型としての性格が強い。

「時間を守る」ことの重要性について書かれているのは第３段落から第５段落である。第３段落では、「時間を守れ」というときの時間は目盛（指標）であること、時間という目盛を守ることが別々の場所での活動（労働市場における分業）のために必要であることが書かれている。第４段落では、時間という指標を守ること、すなわち各自の時間と家族の時間を同調させることが家族という共同体の維持に必要だと書かれている。そして第５段落では、いろいろな集団においてこのような個人の時間と集団の時間の同調性が必要だと一般化されている。

「時間を無駄にしない」ことについて書かれているのは第７段落から第 11 段落である。第７段落では、「時間を無駄にするな」というときの時間が社会資源であること、時間という社会資源は他の多くの社会的資源と異なり所有量に個人差のないこと、そのような平等な資源の大切さを唱えることは平等な社会という理念に抵触しないことが説明されている。第９段落では自由という理念がわれわれの社会では重要で、人生の自由度が近代社会では大きいということが書かれている、第 10 段落では時間という社会資源をどのように使うかについての自由が特に重要だと述べられている。これは、具体例も参考にすると、時間の使い方が人生の選択において重要な要素となりうるということだと理解できる。

以上を踏まえて解答を作るが、社会の根幹にかかわるといえる理由として、どのような社会であるのかを明記したい。例えば、特に平等を理念としているわけではない社会において平等な社会資源の大切さを唱えても、その社会の根幹にはかかわらない。同様に、目盛を守って円滑に分業することが社会の根幹にかかわるのは、労働による生産に支えられた産業社会だからこそである。解答は「時間という指標を守ることで、産業社会において個人の時間と集団の時間を同調させ、別々の場所での活動を円滑に進めることができ、自由と平等を理念とする近代社会においては平等に与えられた社会資源である時間の使い方が重要だから。」となる。

**《解答要素》**

① 時間は目盛（指標）

② 個人の時間と集団の時間を同調させ、別々の場所での活動を円滑に進める

③ 産業社会

④ 時間は社会資源

⑤ 所有量に個人差がない、平等に与えられている

⑥ 時間の使い方が重要

⑦ 自由と平等を理念とする社会

**《参照箇所》**

① 第３段落１文目

② 第３段落５文目、第５段落１文目

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

③ 第３段落５文目、第６段落１文目
④ 第７段落１文目、第10段落１文目
⑤ 第７段落５文目
⑥ 第10段落１～４文目
⑦ 第７段落６文目、第９段落２文目

**問四**

**解答** システムに対する個人の自立性の発揮のために、制度のなかで強制されている活動を一時的に停止して心身の疲労を回復させ、歪んでしまっている時間志向を補正するような、システムの要請によらない活動をするべき。（99字）

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 要約型

**解答範囲** Ⅳ・Ⅴ（第12～第21段落）

**解説**

解答すべきことはすべて本文中に明記されているという点で解きやすい設問だが、解答範囲が広いので不要なことを盛り込んで方向性がずれてしまう恐れがある。直接問われているポイントを把握して解答の骨子を組み立て、残りの字数の中で肉付けするとよい。

この設問で問われているのは、自由時間にするべきことは何か、ということである。これは本文中に二つ挙げられている。一つ目は第13段落１文目「自由時間にするべきことの第一は、制度のなかで強制されている活動を一時的に停止すること、『休む』ことである。」より、制度のなかで強制されている活動を一時的に停止することである。二つ目は第17段落３文目の「『休む』ことに加えて、システムが要請しているわけではないが、自分がやりたいからするという何らかの活動をすることで、自由時間は名実ともに個人に所属するものとなるだろう。」より、システムの要請によらない活動をすることである。これらより、解答の骨子は「制度のなかで強制されている活動を一時的に停止し、加えてシステムの要請によらない活動をするべきだ。」となる。「第一は」という列挙を示すキーワードに反応して、このように必要な要素を拾えるようにしたい。

ここから肉づけに入る。まず、「システムの要請によらない活動」については、第18段落に書かれている筆者の考えより、その活動の内容は歪んでしまっている時間志向を補正するものがよいという説明を加える。ここまでで自由時間にするべきことの内容は解答できたことになるが、その目的を簡潔に加えられるとなおよい。第13段落第３文目で、「休む」ことの効果として、社会システムへの従属状態から一時的に距離をとることができることが重要だと書かれている。第17段落２、３文目では、「休む」ことはシステムに対する個人の自律性の発揮としては弱く、「休む」ことに加えてシステムの要請によらない活動をすることで達成できると書かれている。ここから、システムに対する個人の自律性の発揮は、システムの要請によらない活動の目的であることはもちろん、「休む」ことの目的であったことも読みとれる。第16段落７文目の「～システムに対する個人の自律性を担保するために、決然として『休む』ことが大切なのである。」からもそれは読みとれる。「社会システムへの従属状態から距離をとること」と「システムに対する個人の自律性の発揮」は同義であるから、どちらかにまとめて解答に入れる。

なお、第13段落２文目の「心身の疲労が回復する」を解答に入れてもよいが、「『休む』目的は心身の疲労の回復、システムの要請によらない活動をする目的はシステムに対する個人の自律性の発揮」のように解答しないでほしい。すなわち、「休む」目的が心身の疲労の回復だけであるかのように書か

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

ないでほしい。重要なのは、第13段落3文目にあるように、社会システムへの従属状態から一時的に距離をとれることだからである。

以上を踏まえると解答は「システムに対する個人の自立性の発揮のために、制度のなかで強制されている活動を一時的に停止して心身の疲労を回復させ、歪んでしまっている時間志向を補正するような、システムの要請によらない活動をするべき。」となる。

**《解答要素》**

① 制度の中で強制されている活動を一時的に停止する（「休む」）

② システムの要請によらない活動をする

③ ①②はシステムに対する個人の自立性の発揮が目的である（システムへの従属状態から距離をとる）

④ ②の内容は、歪んでしまっている時間志向を補正するものがよい

**《参照箇所》**

① 第13段落1文目

② 第17段落3文目

③ 第16段落7文目、第17段落2文目、第13段落3文目

④ 第18段落1文目

**問五**

**解答** ちっともやすまず　いきをもつかずに

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 特殊型

**解答範囲** Ⅳ（第12～第16段落）

**解説**

設問は、「筆者は『時計』のどのような様子を指して『産業社会の人間のメタファー（隠喩）』と言っているのか。」である。これはつまり、「『時計』のどのような様子が『産業社会の人間』に類似していると筆者は言っているのか。」という問いである。

そこで、産業社会の人間がどのようなものとして本文中に記述されているかをみてみる。すると第16段落で、なかなか休むことができないという社会の現状が描かれている。「とけいのうた」のなかで「時計」が休んでいない様子を表すのは「ちっともやすまず」「いきをもつかずに」の部分であるから、この部分を解答として抜き出す。他にも休んでいない様子を表す部分はあるが、「われらがねどこで」「やすんで居るまも」、「とけいはばんでも」「かっちんかっちん」など、人間の様子を表すものとしては不適切なので一つに定まる。

**問六**

**解答** 人間は本来、未来志向・現在志向・過去志向を併せ持っているが、変化する社会経済的状況のなかでその時間志向が変形していずれかに偏り、バランスを失ってしまうこと。（78字）

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 要約型

**解答範囲** Ⅴ（第17～第21段落）

**解説**

まず傍線部内の「こうした」という指示語の指示内容をおさえる。これは傍線部直前の一文「このようにわれわれの時間志向は変化する社会経済的状況のなかで変形し、ややもするとバランスを失いがちである。」を指している。解答の中心はこの部分になるが、これでは本来の「われわれの時間志向」がどういうものなのか、また、変形してバランスを失うとはどういうことか

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

わからないので、それらの説明を補足する。

「このように」という指示語はその前の第20段落全体を指している。そこで第20段落を参照すると、社会経済的状況に応じて未来志向・現在志向・過去志向のいずれかに偏った時間志向が広まることが読みとれる。これが変形してバランスを失うということである。

本来の「われわれの時間志向」を説明しているのは第19段落である。「人間とは本質的に時間的な存在」「時間軸の上を行ったり来たりしながら生きている」といった表現があるが、これらは抽象的・比喩的過ぎて、このまま解答に抜き出しても意味が通らない。近くにある具体例や説明を読むことでやっと意味がはっきりとするような表現は、そのまま解答にコピーするのではなく、その具体例や説明を踏まえて、自分が理解できる表現に改めるようにしよう。解答では、第19段落1文目のやや具体的な記述を参考にして、「未来志向・現代志向・過去志向を併せ持っている」とまとめた。

以上より解答は「人間は本来、未来志向・現在志向・過去志向を併せ持っているが、変化する社会経済的状況のなかでその時間志向が変形していずれかに偏り、バランスを失ってしまうこと。」となる。

**《解答要素》**

① 人間は本来、未来志向・現在志向・過去志向を併せ持っている

② その時間志向が変形していずれかに偏り、バランスを失ってしまう

③ ②は社会経済的状況が変化するなかで起こる

**《参照箇所》**

① 第19段落1文目

② 第20段落3～5文目、第21段落1文目

③ 第21段落1文目

（千代田麻理、石川卓郁、柿沼麻衣花）

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

# 2015年度 名古屋大学 前期 国語

## 二 古文（日記）

| 難易度 | 所要時間 | 出典 | 傾向と対策 |
|---|---|---|---|
| ★★★☆☆ | 25分 | 京極伊知子『涙草』からの出題。江戸時代初期成立の日記で、作者の息子・頼母が生まれた寛永二十年（一六四三年）から慶安三年（一六五〇年）までの七年間を描く。作者の京極伊知子は松江城主・京極忠高の娘であり、家臣であった多賀常良に嫁いだが、頼母を生んだ翌年に夫を亡くしている。「涙草」の題は「涙を催すもの」の意。 | ２０１５年度は、単語のレベルもさほど高くなく、主語も追いやすい文章であったため、大意をつかむのは難しくなかった。<br>問一は基本的な知識を問う問題なので、確実におさえたい。問二の現代語訳は、直訳するのは難しくないが、文脈に沿った理解が求められる問題であった。傍線部がやや長いので、訳し落としがないようにも注意したい。問三では和歌の解釈が出題された。これも文脈に沿って修辞法をうまく訳せるかどうかがカギであった。設問数も少なくやさしそうにみえるが、そのぶん丁寧な読解を求められ、基礎力がものをいう問題であったといえる。 |

| 傾向と対策 |
|---|
| 名古屋大学の古文は、設問は比較的同じ傾向だが、本文の長さは毎年大きく異なり、極端に短い年も長い年もある。そのためじっくり読む力も取捨選択をしながら読む力も、どちらも必要になってくる。よって、じっくり省略を補いながら訳す練習と、長めの文章を制限時間内に読む練習を並行して行うのがよい。長めの文章に関しては、センター試験の過去問を多く解くのがよいだろう。<br>また和歌が毎年出ているので、基本知識を固めるのはもちろんのこと、百人一首をはじめとしてなるべく多くの和歌にふれ、自分で解釈できる力をつけていけるとよい。 |

《この解説の使い方》

**本文読解**
「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか（「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分）や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど（「通読」の★部分）について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使い過ぎる人は、この項目を見てみよう。

**設問解説**
設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

**本文解説**
「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識でつくれる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

## 解答

**問一** ① 貴人の妻の敬称で、ここでは頼母の養親となる江戸の親類の奥方を指す。

② 十一月

③ 午前十時頃

④ 墓の下のことであり、ここでは作者の亡くなった夫を指す。

**問二** **ア** 江戸へ行くことを楽しみにしている頼母の無邪気であどけない様子を見るにつけ、この子にお別れし申し上げる悲しさは、どうしようもなかった。

**イ** 実の子ではないとはいっても、このようなかわいらしい様子の頼母を、江戸のお母上はまさかなおざりにはお思いになるまいとあてにするものの

**ウ** 頼母の父が生き長らえていらっしゃるときだったならば、この頼母が江戸へ下りなさるということをも、万事立派にとり行いなさって、見苦しくない後見人であっただろうに、父は亡くなってしまい、残念なことだ

**問三** 私は、頼母とともに江戸へ行くことのできる身の上でもないのに、どうして、涙ばかりが、頼母の出発に先立って流れているのであろうか。

## 本文読解

### 本文を読み始める前に

前書きから、語り手と作者は同一人物であるとわかる。すなわち、地の文の心情描写の主語は作者ということである。また、本問の前書きには、人物関係や場面設定についても丁寧に書かれているので、熟読し、しっかりと状況を把握してから読解に臨みたい。

### 通読

**第1段落第1行～第2行「この君は、～ことに思ひ」**

◎作者は自分の息子である「この君（＝頼母）」に対して尊敬語を使っている。

◎「いかに思し知ることにか」は挿入句で、作者の疑問を表す。

◎「いささか～打消」は重要表現。「少しも～ない」という強い否定を表す。

★「ひたすら」は「思ひ」にかかる。

**第1段落第2行～第3行「急ぎたまう～いとをかし」**

◎「はかなし」は移り変わりやすく頼りない様子を表す語で、「頼りない・無益だ・たわいもない・ちょっとした」などと訳す。ここでは「ちょっとした」の意。

◎「江戸のお母上」は、頼母が養子となる家の奥方のこと。

◎「をかし」は、はしゃぐ息子を愛おしむ作者の心情を表す。

**第2段落第1行～第2行「世の常の子～きものから」**

◎「～ば…まし」で反実仮想を表す。

★「いまひとへ」は「いま（今）」＋「ひとへ（一重）」と分解できる。「もう少し」の意。

◎「なかなか心やすきものから」は少しわかりにくいが、直前部分を手がかりに、「頼母はふつうの子どもではない（＝実の親と別れるのを悲しまない）のでかえって気楽であるが」と解釈する。

◎「ものから」は逆接の確定条件を表す接続助詞。

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

**第２段落第２行～第３行「さすがに、～ぞありける」**

◎傍線が引かれているので、丁寧に読む。

◎「さすがに」は「そうはいうものの・それはそうだがしかし」の意。

◎「たてまつる」は謙譲語で、敬意の対象は頼母。

◎「たてまつらむ」の「む」は婉曲の助動詞「む」連体形。

◎「やるかたなし」は「どうしようもない」の意。

**第３段落第１行～第２行「『江戸の北～頼みながら」**

◎傍線が引かれているので、丁寧に読む。

◎「北の御方」「北の方」とは、貴人の妻のこと。

◎「日頃」には「数日来」という意味と「平生・普段」という意味があり、どちらの意味であるかは文脈から判断する。ここでは後者。

◎「おろか」は漢字では「疎か」。あらゆる面で疎略なさまを表す。

◎マ行四段活用動詞「頼む」は「あてにする」の意。下二段活用の場合は「あてにさせる」の意となる。

**第３段落第２行～第４行「むげに児な～ひやらるる」**

◎「人の中に立ちまじる」は「人の中に加わる・入りまじる」の意。他人と交際するということ。

◎「おぼつかなし」「うしろめたし」はどちらも、息子を心配し、気がかりに思う作者の心情を表している。

★「むげに児ならぬ齢にて」は、まったくの赤ん坊ではないが、しかし幼い年齢であるというニュアンスを含む。

★ここでの「おもむけ」は「面向け」で、「顔」の意だが、特殊な用例である。通常は「趣け・赴け」で「仕向け・意向」の意。

**第３段落第４行～第５行「よろづ、心～を送りける」**

◎訳しにくい箇所だが、傍線は引かれていないので、作者の心がふさいでいるということをざっくりと把握できればよい。

**第４段落第１行～第３行「かくて霜月～のことなし」**

◎「霜月」は旧暦十一月のこと。

◎「なりけり」は断定の助動詞「なり」終止形＋詠嘆の助動詞「けり」終止形

◎「巳の時」は午前十時頃を指す。

◎「いくか」は漢字では「幾日」。「何日」の意。

◎「泣くよりほかのことなし」は直訳すると「泣く以外のことはない」となる。すなわち「泣くばかりである」の意。

**第５段落第１行～第２行「十六日には～がめられて」**

◎「まうづ」「たてまつる」はどちらも謙譲語。「まうづ」の敬意の対象は父、「たてまつる」の敬意の対象は頼母。

◎「させ」は使役の助動詞「さす」連用形。

◎「名残」は、ここでは頼母の後姿を指す。

★「ながむ」はここでは現代語の「ながめる」と同じ意味だが、「物思いにふける」という意味のほうが重要である。

◎頼母を着飾らせて墓参りに行かせたということを把握する。

**第５段落第２行～第３行「『あはれ、～見ならまし」**

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

◎傍線が引かれているので、丁寧に読む。（→問二（ウ））
◎「かひあり」は漢字では「甲斐あり」で、「ききめがある」の意。
◎「もてなす」は対象に積極的に働きかけ何かを行うという意味を表す動詞で、「①とり行う②世話をする③ふるまう④もてはやす」などと訳す。ここでは「とり行う」または「世話をする」の意。

**第5段落第3行～第5行「このたびの～がたくなむ」**

◎「恨めしき世のならひかな」は挿入句。
◎「草のかげ」は「草葉の陰」、すなわちあの世のことである。ここでは、作者の亡き夫のことを指す。
◎「なむ」は係助詞である。文末の「ある」「ありける」のような結びが省略されている。
★「過ぎにしかたの悲しさ」は、作者が夫を亡くしたときの悲しみを指す。

**第5段落第6行「別れ行く涙～に見るらむ」**

◎問題にはなっていないので、歌の大意をつかめればよいだろう。
◎「苔の下」は前文の「草のかげ」とほぼ同義で、頼母の父＝作者の亡き夫を指す。

**第5段落第7行「もろともに～にたつらむ」**

◎和歌の解釈の問題。修辞法に注意しながら、一語一語丁寧に読んで解釈していく。
◎「たつ」は「立つ」＝「生じる」と「発つ」＝「出発する」の掛詞。和歌の中に、平仮名で書かれた動詞や名詞があったら、掛詞を疑う。
★「行く」と「発つ」は縁語。

## 設問解説

**問一**

**解答**

**《合格答案》**

① 貴人の妻の敬称
② 十一月
③ 午前十時頃
④ 墓の下のこと

**《満点答案》**

① 貴人の妻の敬称で、ここでは頼母の養親となる江戸の親類の奥方を指す。
② 十一月
③ 午前十時頃
④ 墓の下のことであり、ここでは作者の亡くなった夫を指す。

**難易度** ★★☆☆☆
**設問パターン** 知識

**解説**

①
「北の御方」あるいは「北の方」は貴人の妻の敬称で、これは彼女らが寝殿造における「北の対」に住んだことに由来する。ここでは頼母が養子に出される江戸の親類の奥方を指すので、そのことも含めるとよりよい解答になるだろう。

②
「霜月」は旧暦十一月のこと。旧暦の月の表現は重要なので覚えておこう。

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

③

「巳の時」は午前十時頃のこと。時刻の表現も月の表現と同様に重要なので覚えておこう。

④

「苔の下」は「苔むした地面の下」の意から、「墓の下」のことを指す。古文単語帳にはあまり載っていない単語だが、「草葉の陰」という似た表現があることや、「父の御墓所」に行ったという本文の記述を踏まえれば、「墓の下」という意味にたどり着くのは難しくない。ここでは「いかに見るらむ」とあるので、墓の下にいる人、すなわち故人である作者の夫を指していると考える。

**問二**

**解答**

**《合格答案》**

**ア** 頼母の無邪気であどけない様子に、お別れし申し上げる悲しさは、どうしようもなかった

**イ** そうはいってもこのようにかわいらしい様子の頼母を、江戸のお母上はまさかなおざりにはお思いになるまいとあてにするものの

**ウ** 頼母の父が生き長らえていらっしゃるときであったならば、このことをも、万事立派にとり行いなさって、見苦しくない後見人であっただろうに

**《満点答案》**

**ア** 江戸へ行くことを楽しみにしている頼母の無邪気であどけない様子を見るにつけ、この子にお別れし申し上げる悲しさは、どうしようもなかった。

**イ** 実の子ではないとはいっても、このようなかわいらしい様子の頼母を、江戸のお母上はまさかなおざりにはお思いになるまいとあてにするものの

**ウ** 頼母の父が生き長らえていらっしゃるときだったならば、この頼母が江戸へ下りなさるということをも、万事立派にとり行いなさって、見苦しくない後見人であっただろうに、父は亡くなってしまい、残念なことだ

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 現代語訳

**解説**

「語を補って」と指示されているので、前後の流れをしっかりと確認し、傍線部に抜けている主語や目的語が何であるかをつかもう。また、「作者の心情に留意して」とも指示されているが、こちらはあくまで「留意」するにとどめ、現代語訳の範囲を逸脱した答案をつくらないように注意しよう。

**ア**

まず傍線部を品詞分解すると、「何心なく/いはけなき/ありさま/に、/ひき別れ/たてまつら/む（婉曲の助動詞「む」連体形）/悲しさ/は、/やるかたなく/ぞ（係助詞）/あり/ける（過去の助動詞「けり」連体形）」となる。次に、品詞分解をもとにして、順番に直訳していく。「何心なくいはけなきありさまに」を直訳すると、「無邪気であどけない様子に」となる。これは文脈から、作者の息子である頼母の様子であるとわかる。「何心なく」は古文単語帳にはあまり載っていない単語なので、「どんな心もない」→「邪な心がない」→「無邪気な」と連想して訳す。また文脈から、直後の「いはけ

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

なき」の類義語であると推測することもできる。続く「ひき別れたてまつらむ悲しさは、やるかたなくぞありける」は、直訳すると「お別れし申し上げる悲しさは、どうしようもなかった」となる。また、訳には影響しないが、「～ぞ～連体形」の係り結びが起こっていることにも注意する。

ここまでの内容をまとめると、「頼母の無邪気であどけない様子に、お別れ申し上げる悲しさは、どうしようもなかった」となる。「無邪気であどけない様子に」の「に」の用法が曖昧なので、「無邪気であどけない様子を見るにつけ」などと補ったうえで、作者の「悲しさ」との対比がわかるように、「江戸へ行くことを楽しみにしている頼母の無邪気であどけない様子」などとつけ加えると、《満点答案》となる。

**イ**

傍線部を品詞分解すると、「さりとも/かかる/らうたき/ありさま/を、/おろかに/は/よも/思し召さ/じ（打消推量の助動詞「じ」終止形）/と/頼み/ながら」となる。

訳すにあたり、まずは人物を補う。文脈から、「らうたきありさま」であるのは頼母であり、「おろかにはよも思し召さじ」と作者があてにしているのは「江戸のお母上」であるとわかる。

ポイントは「さりとも」の訳である。「さりとも」は現状を認めながらも別の事態を望む気持ちを表し、「そうはいっても・いくらなんでも」などと訳す。訳す際には、「現状」と「望まれる別の事態」がそれぞれ何であるか、しっかりと把握することが大切である。

傍線部からは、「望まれる別の事態」が「江戸のお母上が頼母のことをなおざりに思わないこと（＝大切にしてくれること）」であるとわかる。ということは、「現状」は「江戸のお母上が頼母のことをなおざりに思ってもおかしくない事態」なのである。しかし、ここで「さりとも」が直前部分を受けていると考えると、「現状」が「江戸のお母上の心がけが素晴らしいと聞いていること」となってしまい、意味が通らない。

直前部分を受けていないならば、何を指しているのか？　考えられるのは、本文中に記述されていることではなく、本文の前提となっている内容、すなわち前書きの内容である。ここで前書きの読解ができていれば、「頼母が江戸の親類に養子として迎えられる」という記述から、「現状」は「頼母が江戸のお母上の実の子でないこと」であると思い至ることができるだろう。これを「さりとも」の訳に当てはめてみると、きれいに文脈に合致する訳になり、《満点答案》となる。前書きの重要性がよくわかる問題である。

**ウ**

品詞分解すると、「父/の/ながらへ/ます/世/なり/せ/ば、/この/御こと/を/も、/よろづ/かひある/さま/に/もてなし/たまひ/て、/めやすき/後見/なら/まし」となる。

一つ目のポイントは、反実仮想の助動詞「まし」である。「～ましかば～まし」「～ませば～まし」「～せば～まし」「未然形＋ば～まし」の形で、「もし～だったら、～だったろうに」という、事実に反することを仮に想像する表現。「まし」が含まれる文を訳す際には、仮想されている事柄だけでなく、事実がどうなのかもしっかりとつかんでおくようにしよう。この問題の場合、仮想されているのは「頼母の父が生きていること」であるから、事実はその反対で、「頼母の父が死んでいること」となる。

二つ目のポイントは、「この御こと」の訳である。作者は「頼母の父が生きていたら～見苦しくない後見人であっただろうに」と仮想しているので、これは何の後見人であるのか考えてみる。

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

直後の「このたびの～下りたまふべきに」は傍線部と同じく、頼母の父が生きていたらと作者が想像している部分である。「下りたまふ」という語から、「このたびの道」は「頼母が江戸へ向かう道中」の意であるとわかる。ここから、頼母を江戸へ養子に出すことが話題になっているとわかるので、「この御こと」は「頼母を江戸の親類のところへ養子に出すこと」であり、「頼母の父が生きていたら、頼母を養子に出すことの後見人になってくれただろうに」と作者が仮想しているとわかる。

**問三**

**解答**

**《合格答案》**

私は、頼母とともに行くことのできる身の上でもないのに、どうして、涙ばかりが、先に出ているのであろうか。

**《満点答案》**

私は、頼母とともに江戸へ行くことのできる身の上でもないのに、どうして、涙ばかりが、頼母の出発に先立って流れているのであろうか。

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 和歌

**解説**

品詞分解すると、「もろともに/行く/べき（可能の助動詞「べし」連体形）/身/に（断定の助動詞「なり」連用形）/も/あら/なく（打消の助動詞「ず」連用形）/に/涙/ばかり/や（疑問の係助詞）/先に/たつ/らむ（現在の原因推量の助動詞「らむ」連体形）」となる。直訳すると、「ともに行くことのできる身の上でもないのに、どうして、涙ばかりが、先に出ているのであろうか」となる。

まず、「もろともに」の部分に語を補う。ここまでの流れを踏まえると、作者が息子である頼母とともに江戸へ行くことができない、ということをいっているとわかる。

次に、掛詞を解釈する。「涙」が何の「先にたつ」のかを考えると、頼母が江戸へ「発つ」よりも先に涙が「立つ」ことを指しているとわかる。これを踏まえ、どちらの意味も含むように下の句を解釈すると、「どうして、涙ばかりが、頼母の出発に先立って流れているのであろうか」となる。

注意すべきは「先にたつらむ」の「らむ」の用法である。単なる現在推量では意味が通らないことと、疑問の係助詞「や」があることから、現在の原因推量の用法であると判断する。

**本文解説**

**現代語訳**

この君（＝頼母）は、どのように思っていらっしゃることだろうか、少しも別れを悲しいともお思いにならず、一途に、江戸へ下りなさることをうれしいことに思い、お急ぎになって、ちょっとしたおもちゃを、人が差し上げるものをも、「これは江戸のお母上へ差し上げるものにしよう」と用意しておきなさりながら、「私も江戸へ行く準備で忙しいなあ」と仰って、走り回りなさるので、とてもかわいい。

ふつうの子どものように、親の近くを離れがたく、親を恋しく思って悲しみなさるならば、もう少し（私の）思いもまさって悲しかっただろうに、（頼母はそうでないので）かえって気楽であるが、そうはいうものの、このように、無邪気であどけない様子に、お別れ申し上げる悲しさは、どうしようも

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

なかった。

「江戸の奥方の御心がけは並ぶものがなく、珍しいくらいでいらっしゃいます」と誰もが褒め感心し申し上げるのを、普段から伝え聞いていたことであるので、それにしても(頼母が)このようなかわいらしい様子であるのを、まさかなおざりにはお思いになるまいとあてにするものの、(頼母は)まったくの赤ん坊ではない(けれども、幼い)年齢であって、まだしっかりと他人の顔を見分けなさらず、中途半端な幼い年齢で、たくさんの人の中に加わりなさるようなことは、やはり心配で、気掛かりに思われる。万事につけて、心が昼夜の別なく、あれこれかき集めて思うにつけても、気持ちが晴れそうになく、声をあげて泣くばかりで日を過ごした。

こうして十一月十余日になった。(頼母が江戸へ)下りなさるのによい吉日などを、しかるべき場所で、よい時刻を占わせると、「十九日が、吉日でありますよ。巳の時(＝午前十時頃)に出発してよいでしょう」と申したので、それならば、あと何日であるよと、日を数えては泣くばかりであった。

十六日には、父の御墓所へお参りさせ申し上げる。美しく装束を着せ申し上げて、装束をきちんとつくろって(墓参りに)出し申し上げ、出掛けていく後姿もいよいよ見守られて、「ああ、父が生き長らえていらっしゃるときだったならば、この御こと(＝頼母が江戸へ下ること)をも、万事立派にとり行いなさって、見苦しくない後見人であっただろうに。今回の道中にも(頼母を)連れて下りなさるだろうに、恨めしい人生のさだめであるなあ、誰も逃れられないことではあるが、死に遅れたり、先に死んだりすることは、やはりどうにもならないなあ。あの世でも、どれほど悲しくご覧になっているだろう」と、過去の悲しさも、いまさっきのように思い出して、涙も抑えるのが難しい。

別れ行く……(我が子と別れ行く悲しさのために涙がかかる私の袖を、夫は墓の下でどのように見ているだろうか)

もろともに……(私は、我が子と一緒に江戸へ行くことのできる身でもないのに、どうして、涙ばかりが、我が子の出発に先立って出るのであろうか)

用語解説

**いささか**　(打消の語を伴って)少しも(～ない)・まったく(～ない)

**はかなし【果無し】**　①ちょっとした②頼りない③たわいない④無益だ

**したたむ【認む】**　①用意する②整理する③治める④食べる⑤書き記す

**こころやすし【心やすし】**　気楽である・安心である

**さすがに**　そうはいうものの・そうはいってもやはり

**いはけなし**　あどけない・子どもっぽい

**たぐひなし【類無し・比無し】**　並ぶものがない

**めづらかなり【珍かなり】**　珍しいさま・ふつうと違うさま

**ひごろ【日頃】**　①普段②数日来

**らうたし**　かわいい・愛らしい

**おろかなり【疎かなり】**　①疎略だ②言い尽くせない③劣る

**よも**　(多く打消推量の助動詞「じ」を伴って)まさか(～すまい)

**むげに【無下に】**　むやみに・ひどく

**はかばかし【果果し・捗捗し】**　①しっかりしている②はっきりしている

**あまた【数多】**　たくさん

**おぼつかなし**　①心配だ②はっきりしない③待ち遠しい

**うしろめたし**　①気掛かりだ②後ろ暗い

**よろづ【万】**　万事

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

**ねをなく【音を泣く】** 声を出して泣く

**よろし** ①まあよい・悪くはない②普通である

**まうづ【詣づ】** ①参詣する②参上する

**なごり【名残】** 物事や人が過ぎ去ったあと、なおその様子・面影などが残ること・その様子・面影

**ながむ【眺む】** じっと遠くを見る、物思いにふける

**もてなす** ①とり行う②ふるまう③世話をする・待遇する

**めやすし【目安し】** 見苦しくない・感じがよい

**うしろみ【後見】** 後見人

**ぐす【具す】** 連れる・伴う

**いふかひなし【言ふかひなし】** どうにもならない

**【参考】月の名称・時刻の数え方**

旧暦の月の名称を一月から順に挙げると、睦月（一月）、如月（二月）、弥生（三月）、卯月（四月）、皐月（五月）、水無月（六月）、文月（七月）、葉月（八月）、長月（九月）、神無月（十月）、霜月（十一月）、師走（十二月）となる。これらは古文を読むうえで重要なので覚えておこう。

また、江戸時代以前は、一昼夜を十二に分け、それぞれに十二支を当てはめて時刻を表していた。例えば「子の時」は現在の午前零時頃およびその前後二時間を指す。

この時刻の表し方の名残として「午前」「午後」がある。この「午」は「午の時」（午後零時頃）のこと。「午の時」より前の時間が「午前」、後の時間が「午後」というわけである。また、ほかの例として「丑三つ時」があるが、これは「丑の時」（午前一時～午前三時頃）の約二時間を四等分した三つ目の時間、すなわち午前二時頃を指す。

（築島愛美、山崎恭子、松田朋佳）

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

# 2015年度 名古屋大学 前期 国語

## 三 漢文（儒家の思想）

| 難易度 | 所要時間 | 出典 | 傾向と対策 |
|---|---|---|---|
| ★★★☆☆ | 30分 | 方孝孺（ほうこうじゅ）『遜志斎集（そんしさいしゅう）』からの出題。方孝孺は明初の朱子学者・政治家。字（あざな）は希直・希古、号は遜志。建文帝に重用されて翰林院（重要な詔勅の起草などを行う天子直属の機関）侍講、ついで侍講学士に任ぜられ、国政に参与した。靖難の変に敗れて捕らえられたのち、儒者として名高かった彼は永楽帝即位の詔を起草するよう求められたが、建文帝への義理から断固として拒否する。それが永楽帝の怒りにふれたため、方孝孺自身は磔刑に処され、八〇〇人以上いた彼の一族も皆殺しとなった。<br>著書として残存するのは『遜志斎集』二四巻のみであり、思想内容は朱子学の枠を出ない。大義名分を体現した正義の人として、党争・弾圧の激しかった明末に東林派などから高く評価されている。 | 文章量は300字弱と、２０１４年度とほとんど変わらない長さである。途中に「鄙」「貪」といった抽象的な概念が出てくるなど読解しづらい箇所はあったかもしれないが、「古の君子」と「今の士」の比較を中心に論が展開されているから、それぞれについて述べられていることを整理しながら理解していけば、スラスラと読み進められるだろう。<br>解答の順番は、順々に本文の理解が深まっていくので問一から順に解いていくのがよい。ただ、問四の書き下しの問題で送り仮名に悩んで時間を使ってしまわないように。文脈から傍線部の意味が大まかにとれたなら、一旦はとばしてしまうのもありだろう。<br>本文の特徴として、理由や比較を明示するような表現や指示語によって文と文のつながりが見えやすくなっていることがある。それに即した形で解答の根拠を拾い、その内容を簡潔に表現し、本文の論理構成に当てはめて文章を再構成するようなかたちで解答をまとめることができる。<br>問三では、二重傍線部直前の「聖賢より之を観れば」を目印にさかのぼれば、直前の二文で今の士人の聖賢の道に対する態度・姿勢について詳しく述べている箇所から誰のどんなところが「浅き」といっているのかがはっきりわかるし、ここが解答の根拠になるのは明白である。<br>問五では傍線部の理由を表す「所以」がキーワードとなり、やはり直前の「今之士則以為～非過深乎」が解答の根拠になってくる。<br>問七は、昔の君子と比較して今の士人はこうであるから今の大学はこうあるべきだ、という本文全体の流れに即し |

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

## 傾向と対策

て解答をまとめる必要がある。主張のバランスとして（割く字数のことではない）あくまで今の大学に対する見解を解答の中心から逸らさないように、また、比較の内容と大学に対する見解の内容をつなげただけの解答にしないように注意しよう。

いずれの設問も、なんとなく傍線部の直前部分や解答の根拠らしき箇所の内容をつなげて答えればいいだろうといういいかげんな解答のまとめ方ではいけない。本文の論理構成に即していない解答を書いてしまうおそれがあり、本文を理解していないとして場合によっては大幅に減点されてしまいかねないからだ。取れる点を取りこぼしてしまわないように、もっともらしい解答を書いて満足するのではなく、本文の論理の流れに沿った形で文章をまとめるように気をつけよう。

《この解説の使い方》

**本文読解**

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み（◎）、ワンランク上の読み（☆）、脳内で把握された内容（▼）を適宜載せてある。

**設問解説**

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

**本文解説**

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名（作品名を書き下す場合を除く）のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

**解答**

**問一** a なほ［なお］　b のみ　c ゆゑん［ゆえん］

**問二** 昔の君子はこの上なく長大な聖賢の道を一生学び続け、決して自らの学問が完成したとは考えなかったから。

**問三** 人のまねをするだけの学問で満足し、ごく狭い範囲でしか影響力がないのに自らを徳が高いと見なしている今の士人が、とても浅はかだといっている。

**問四** 固より古の君子の辞譲して居る（こと）を肯んぜざる所の者なり。

**問五** 今の士人は分をわきまえておらず、学問の深さや徳の高さが不十分なのにひたすらに上の地位を望むところ。

**問六** お上が士人をその人の才能に応じて用いていれば、富貴に対して貪欲な者も自然といなくなるだろう。

**問七** 昔の君子が聖賢の道を謙虚に生涯学び、能力がありながら高い地位に留まることを辞退したのに対し、今の士人は大した学問も人徳もないのにひたすらに高い地位や俸禄（ろく）を求めているため、優秀な人材が育たない。だから、今の大学は真に優秀な人材を育てるために、富貴にこだわらない心と、道徳を重視した教育を行うべきである。（150字）

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

本文読解

通読

**士たるの患ひは、常に自ら処(を)ること太(はなは)だ浅くして、上を望むこと過(はなは)だ深(ふか)きに在り。**

◎ここでいう「士」はさむらいじゃなくて士人のこと。

▼士人の病的なところは、浅はかなくせに上を目指してばかりいるところだ。

◎上を望む、っていうのは地位や身分の話をしているのかな。

**聖賢の道は至大なり。其の全きは以て天下を治め風俗を変ずべくして、其の緒余、a猶以て一官を守り、一郷を化するに足る。止(ただ)小材曲芸b而已には非ざるなり。**

◎「小材曲芸」は【語注】より「小さな才能や技能」。

▼聖賢の道はこの上なく大きい。天下を治めて風俗まで変えてしまうし、それにとどまらず一官職を守って一集落に変化をあたえてしまう。ただの小さな才能や技能なんかではない。

◎聖賢の道っていうのは小手先の才能や技能なんかではたどり着けない境地なんだね。

**故に古の君子は、之を学ぶこと終身なるも、敢へて成ると為さず。[1]材用に周(あまね)きも、敢へて以て能(よ)くすと為さず。**

◎この二文は対句っぽく連なっている。二文とも「～できるけど、敢えてできていないと見なす」みたいな謙虚さのことを伝えたいらしい。

☆「材」には才能という意味がある。また、「用」は通用の用だし、「あまねく」は広く一般的にといった意味だから、才能が広くどんな仕事でも通用する、みたいな意味かな。

▼昔の君子は聖賢の道の至大さを知っているから学問が完成したとは思わずに学び続けたし、才能があってもそれじゃ足りないって考えて謙虚に聖賢の道を求め続けたんだね。

**今の士は然らず。**

▼今の士人はそうではない。

◎昔の君子との比較か！

**習ふ所の者、未だ剽窃誦説(へうせつしようせつ)の間を脱せざるも、充(み)ちて以て足れりと為す。**

◎剽窃はレポート書くときにやっちゃいけないやつだ！

【語注】を見るとやはり「剽窃誦説」は「人のものを取ってきて自分の考えのように読んだり説いたりすること」。

▼学問をする今の士人は、人の考えを拾ってきただけなのに、自分の学問が完成したと思って満足しちゃう……。

**能くする所の者は、室家隣里の近きに過ぎざるも、肆然(しぜん)として以て高しと為す。**

▼才能ある人でも、近隣の集落を教化できたくらいで自らは徳が高いのだと思ってしまう。

◎ちょっと近所で評判だからってつい思い上がっちゃうんだね……。

**聖賢より之を観(み)れば、何ぞ其れ浅きや。**

▼謙虚に聖賢の道を学び続けた君子と比べればなんと浅はかなことよ……。

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

**上の爵禄は、賢者を待つ。所以にして、[2]固古君子之所二辞譲而不レ肯レ居者也。**

◎「待つ」は文字通りの意味ではなく、「待遇する」という意味だろう。「所以」は理由などの意味を表す重要語。

**今の士は則ち以為へらく、分之宜しく得べしと。**

◎「以為へらく」は「思うに」。

▼今の士人は思うに、昔の君子を見習って身の程をわきまえるべき。

**卑きに処りては則ち崇きを覬ひ、外に仕へては則ち内を希む。**

◎外とか内っていうのは、地方にとばされるよりも都の中で仕えることを望んでいる、ってことかな。

▼低い地位にいたら高い地位を願い、田舎で仕官する人は中央で仕えることを望む。

**怨訐して悲戚し、勢取して力求す。其の上を望むこと、過だ深きに非ざるや。**

◎【語注】より、「怨訐」は「怨み嘆く」、「悲戚」は「悲しみ傷む」、「勢取」は「力任せに得る」、「力求」は「無理に求める」。

☆字面だけ見ると、ここは上の地位を望む心が深くないっていっているように思えるかもしれないけど、文脈を考えたらまったくの逆だな。反語的な用法なのだろうか。

▼自分の低い地位を怨み嘆いて悲しみ傷み、力任せに無理に地位を得ようと求める。上の地位を望む心のなんと深いことよ。

**[3]上の育才に労して、功少きを病む所以なり。然れども亦た故有り。**

◎「上」は「お上」のことだろう。「功」は「功績・成果」。

▼つまり、才能ある士人を育成するのに苦労しているのに一向に育たないのである……しかしそれにはわけがある。

**鄙は求むる所より生じ、貪は用ふる所より生ず。**

◎鄙ってなんだろう？　貪は貪欲ってことかな。どちらもマイナスイメージ。求める、用いるって誰が？

**之を求めて其の道を尽くせば、則ち鄙なる者も化すべし。[4]之を用ふること其の才に当たれば、則ち貪なる者も消ゆるべし。**

▼士人に道理を尽くすことを求めれば卑しい人も変化・成長していくだろう。才能に合わせて仕えさせればただただ高い地位を求めるような貪欲な人もいなくなるだろう。

◎之を用ふる＝士人に役職をあたえて仕えさせる、ってことか。鄙とか貪っていうのは今の士人のだめなところをいってたんだな。

☆今まで散々、今の士人のだめなところをいってたけど、中途半端な努力しかしないくせに高い地位を求める貪欲さと卑しさ、みたいなことかな。

**今の成均は、才を育つるの地なり。才の美なる者を得て、之を用ひんと欲せば、二者を舎てて奚をか先にせん。**

◎【語注】より「成均」＝「大学」。「舎」＝「捨」。

▼今の大学は才能を育む場所だ。優秀な者を獲得して仕官させようと思えば、二つのものを捨てて何を重視すればいいのか。

◎二者＝鄙＋貪かな。今の士人は鄙＝卑しさ、とか貪＝富貴を求める貪欲さとかを捨てないといけない。じゃあ才能の高い士人を育てて仕官させ

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

るには、士人を育成する大学で何を重視すればいいのか？

**士は惟(た)だ道徳を慕ふの志有りて、然る後に以て大任に当たるべし。**

▼士人はただ道徳を慕う心をもつようにし、それができて初めて高い地位・大きな任務にあたるのがよい。

◎直前の疑問に対する答えは道徳か！

**富貴を軽んずるの心有りて、然る後に以て大功を成すべし。**

▼富貴を軽視する心をもっていればそのあとに大きな成功ができるのだ。

◎道徳を大事にしていれば結果はあとからついてくる！

## 設問解説

**問一**

**解答** a なほ［なお］ b のみ c ゆゑん［ゆえん］

**難易度** ★☆☆☆☆

**設問パターン** 漢字の読み

**解説**

いずれも単純に知っているかどうかが問われており、文脈に関係なく答えられる問題である。特に指示がないのでaとcは歴史的仮名遣いで答えても現代語表記で答えても構わないだろう。

a猶（なホ）……そのうえ

b而已（のみ）……～だけだ

c所以（ゆゑん）……～する理由・手段 など

**問二**

**解答** 昔の君子はこの上なく長大な聖賢の道を一生学び続け、決して自らの学問が完成したとは考えなかったから。

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 理由説明

**解説**

まずは傍線部の解釈をしよう。

「材」は「小材曲芸」の注釈の説明から類推して、才能のことだとすぐにわかっただろうか。「あまねし」は現代でも「あまねく知れ渡る」のように副詞的に使われるが、広く行き渡る、といった意味である。とすれば、材が用にあまねくとは、あらゆる仕事に通用し広範囲をカバーできるだけの才能をもっている、といった解釈になるだろう。そして、「敢へて以て能くすと為さず」とつながり、あらゆる仕事ができるだけの才能はあるのに自分ではできているとは思っていなかった、という解釈ができる。

次に傍線部までの文脈を整理しよう。まず2文目から聖賢の道についての説明がなされているが、要は「聖賢の道は至大なり」ということがいいたいのだとわかるだろうか。「止小材曲芸のみには非ざるなり。」も結局は聖賢の道が小手先の才能や技能のみではたどり着かないほど大きなものであることを説明している。そして「故に」から「古の君子は、之を学ぶこと終身なるも、敢へて成ると為さず。」につながる。つまり、聖賢の道はあまりに大きいために一生かけて学んでも学びきれないと考えた、ということである。だからこそ才能があっても自らでは仕事ができないと考える、という傍線部の内容につながる。そのあとに「今の士は然らず。」とあって古の君子との比較が始まるので、解答の根拠を拾うのは傍線部以前の内容だけで大丈夫だろう。

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

よって、解答の根拠として拾うべき内容は、

①古の君子は聖賢の道を一生学び続けても学びきれないものだと考えていた

②そしてそれは聖賢の道がこの上なく長大なものだから

「成る」という表現を「学問が完成する」とわかりやすく説明し、①②の内容を傍線部の理由としてまとめよう。

**問三**

**解答** 人のまねをするだけの学問で満足し、ごく狭い範囲でしか影響力がないのに自らを徳が高いと見なしている今の士人が、とても浅はかだといっている。

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 内容説明

**解説**

まず波線部は、詠嘆の句形に注目すると、「なんと浅いのだろうか」といった意味になる。「何ぞ」のあとに「其れ」が加わると強意の意味が加わり、より強い主張を表現することができる。

何（其）～（也）…何ぞ（其れ）～（や）　「なんとまあ～だなあ」

次に問二で確認したように、2文目から傍線部1まで、聖賢の道の大きさとそれを真摯に学び続けた古の君子の姿勢について述べられている。そして、「今の士は然らず。」から比較が始まり、今の士人の聖賢の道に対する姿勢について述べられ、「聖賢より之を観れば、何ぞ其れ浅きや。」につながる。つまり、「之」＝今の士人の聖賢の道に対する姿勢、であり、謙虚に学び続けた古の君子と違って今の士人の姿勢は浅はかだということである。

では、浅はかな姿勢とはどのような姿勢なのかというと、直前の二文にあるように、

①（人のものを取ってきて自分の考えのように読んだり説いたりするといった）人のまねをするだけの学問で満足している。

②（近隣や隣の里といった）ごく狭い範囲でしか影響力がないのに（評判をほしいままにして）自ら徳が高いのだと見なしている。

①②の内容から今の士人が浅はかな姿勢・態度である、といったかたちで解答をまとめよう。

**問四**

**解答** 固より古の君子の辞譲して居る（こと）を肯んぜざる所の者なり。

**難易度** ★★★☆☆

**設問パターン** 書き下し

**解説**

わかりやすいところから徐々に攻めていこう。「古君子」は文中に何度も出てきているように、「古の君子」のことだろう。とすると、「固」は「固より」と読むことができるだろう。これは漢文の基本語彙であり、入試でも単独で読みを聞いてくることがあるので気をつけよう。「辞譲」は間に置き字などがなく連続していることからこれで一つの熟語なのではないかと疑おう。傍線部をざっと見てすぐに解消できるのはこのくらいだろうか。次に、返り点に従って順番に文字を並べ、単語のまとまりごとに分解してみると次のようになる。

固より／古の君子／之／辞譲／而／居／肯／不／所／者／也。

否定の意味を表す「不」の直前にあることから、「肯」は動詞であり、「肯んず」と読む。ここまでわかると、最後は「肯んぜざる所の者なり。」と締めるかたちがみえてきたのではないだろうか。置き字の「而」は、次のよ

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

うに

直前に読む字に送り仮名を付して意味を表す。

○順接…連用形＋テ

○逆接…連体形＋モ／連体形＋ニ／已然形＋ドモ……など

ここで、文脈について確認してみよう。傍線部を含む文章の主語は「上の爵禄」であり、「辞譲す」・「居る」の目的語にも相当するのだと気づいてほしい。つまり、俸禄を辞退して譲る、とかその地位に居座る、といった意味になってくるのではないだろうか。そして傍線部直後からは古の君子と比べて今の士人は身の程をわきまえておらず、とにかく地位を求めたがるのだといっている。つまり、古の君子は俸禄を強引に望むということがなく、それどころか辞退してほかの人に譲るし、高い地位に居座ろうとすることもないのだろう。ということは、（爵禄を）「辞譲す」と「居る（こと）を肯んぜざる」（＝居ることをよしとしない）を順接的に並列させるのがよさそうだ。「辞譲す」の連用形に送り仮名のテをつければよいので、「辞譲して居るを肯んぜざる」となる。「辞譲す」と「居る」の主語は古の君子であるから、「之」は主格の「の」として用いられている。

**問五**

**解答**　今の士人は分をわきまえておらず、学問の深さや徳の高さが不十分なのにひたすらに上の地位を望むところ。

**難易度**　★★☆☆☆

**設問パターン**　内容説明

**解説**

まず傍線部を解釈してみよう。

上はお上のことである。育才に労するとは、優秀な人材を育てるのに苦労しているということだろう。しかし苦労している割には功が少ない、つまり成果が出ないということだろう。所以は頻出語彙で、ここでは原因という意味で用いられているのだろう。

傍線部直前まで今の士人の地位を求めたがる態度について説明があり、それはお上が教育に苦心しても成果が出ないことを悩んでいる原因だというのだ。設問では傍線部の内容に対する原因は何かと問われているので、解答の根拠は今の士人の態度について述べている「今之士則以為～非過深乎。」（7～9行目）の箇所になる。

「今士則以為、分之宜得。」

…今の士人は分をわきまえるべきであるといっているということは、今の士人は分をわきまえられていないということだろう。分をわきまえていない・身の程知らずということは、必ず「××（の身分）のくせに○○だ」というかたちで説明できる。

「其望乎上、非過深乎」

…8行目に丁寧に説明されているがその内容は、今の士人は上の地位を望む心が非常に深いのだというこの一文に集約されている。また、この表現と類似する表現に見覚えはないだろうか。冒頭を見ると、「為士之患、常在乎自処太浅、而望乎上過深。」（＝士人の病気というべきことは、自らの学問はひどく浅いままであるのに、上の地位を望む心が非常に深いことである。）とある。「常在乎自処太浅」の内容は4～6行目に詳しく述べられているように、聖賢の道を学ぶにも学びが浅く、人に広く影響をあたえうるほどの徳もない、といった内容が該当する。

以上から「××（の身分）のくせに○○だ」の××の内容は「常在乎自処太浅」の内容にあたり、○○の内容は「其望乎上、非過深乎」に該当する。そしてこのように今の士人が身の程知らずにもろくに学問をせず上の地位

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

を目指すことばかりに躍起になっていることが原因で、お上は彼らの教育に苦労しているのだというのも説明がつく。

最後に注意しなければならないのが、傍線部直後の「然亦有故焉。」という一文である。「故」に惑わされてこれ以降の内容も解答の根拠になるのではないかと思った人もいるかもしれないが、これは傍線部の内容に対する原因ではなく、「今之士則以為～非過深乎。」（7～9行目）の原因を解説しているので気をつけてほしい。傍線部前後の文脈を整理すると、

今の士人は分をわきまえずに地位ばかり求める。

←

だからお上は士人の教育に苦心しても成果が出ない。（傍線部3）

←

今の士人は確かに身の程知らずな態度であるが、しかしそれにもまた理由があるのだ。

傍線部の内容の原因として、「然亦有故焉。」（9・10行目）以降の内容も解答の根拠として含めようとすれば字数が間違いなく足りないから、素直に直前までの流れから解答の根拠を拾ってくるのがよいだろう。

よって解答をまとめるうえでのポイントは、

①今の士人は分をわきまえていない。

というのも、

②士人は学問が浅く、徳も高くないのに

③ひたすらに上の地位を求めている。

**問六**

**解答** お上が士人をその人の才能に応じて用いていれば、富貴に対して貪欲な者も自然といなくなるだろう。

**難易度** ★★★★☆

**設問パターン** 現代語訳

**解説**

さて、ここまで順調に読み進めてきた人も「鄙」や「貪」という言葉が出てきてからは理解が追いつかなくなっていったかもしれない。とりあえず、「求之尽其道、則鄙者可化矣。」から、道を尽くす（＝道徳心を尽くす）ように求めれば、鄙なる者も変わるのだというから、「鄙」はマイナスイメージを表す言葉なのだろう。わからなくてもこの設問を解くうえでは問題ないが、「鄙」は「卑」と読みも意味も同じである。

そして傍線部といま見た直前の一文が対句になっている。「貪」は貪欲さのことを指していることに気づいただろうか。つまり、士人の富貴に対する貪欲さのことであり、本文では当然マイナスイメージをもっている。貪なる者（＝貪欲に地位を求める人）が消えるのであるから、「用之当其才」は何かしらプラスイメージのことをしたというイメージをもっておいてほしい。

「用」は雇用や徴用という熟語があるように、人を働かせるという意味がある。「才」は本文中に何度も出てきているように才能のことである。つまり「之を用ふること其の才に当たれば」とは、士人にその人の才能にちょうどぴったり合った仕事をあたえる、ということである。士人は自分の才能に見合わなくてもとにかく高い地位を欲する傾向があるから、お上のほうからその人にふさわしい役割をあたえていくことが大事だというのだ。

**問七**

**解答** 昔の君子が聖賢の道を謙虚に生涯学び、能力がありながら高い地位に留まることを辞退したのに対し、今の士人は大した学問も人徳もないのにひたすらに高い地位や俸禄（ろく）を求めているため、優秀な人材が育

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

たない。だから、今の大学は真に優秀な人材を育てるために、富貴にこだわらない心と、道徳を重視した教育を行うべきである。（150字）

**難易度** ★★★★☆

**設問パターン** 内容説明

解説

名大漢文の最終問題は要約問題と捉えられがちだが、設問の要求に対して結果として広く本文全体から根拠を拾い解答をまとめないといけないだけなので、要約問題として取り組まないほうがいい（結局のところ「今之成均」のあり方についての主張を主眼として本文を締めくくっているので、結果として要約問題になっているのだが）。設問に沿わない細部の内容を解答に含めたり、要求に合わない答え方をしたりしないように気をつけよう。

作者が「今之成均」について述べているのは最後の三行であるから、この箇所が解答のメインポイントとなるだろう。

まず「今之成均、育才之地也。」とあるように、今の大学は才能ある優秀な人材を育成する場であるべきで、その役割は「上之所以労於育才、而病於少功也。」とあるように、今の士人からは優秀な人材が育たない現状だからこそよりいっそう求められるものなのだろう。

次に「欲得才之美者、而用之、舍二者奚先乎。」という問いに自ら答えるかたちで、士人はただ道徳を慕うべきだといい、さらには富貴を軽視する心があれば功績はあとからついてくるのだともいっている。つまり、卑しさや富貴に対する貪欲さを捨てさせ道徳を重視する教育こそ、真に優秀な人材を育てるために必要なのだと主張しているのである。

設問には「古之君子」と「今之士」との比較を通して述べよとあるが、優秀な人材が育たない今の士人の現状を昔の君子との比較を通じて述べたうえで、だからこそ大学は道徳教育を重視すべきなのだというかたちで解答のメインポイントにつなげればよいだろう。

本文中に何度も両者の比較が述べられているが、要は昔の君子が有能でありながら謙虚な姿勢であったのに対し今の士人は大した実力もないくせに富貴を求めたがるという内容を整理できれば、だからこそ富貴を求める貪欲さではなく道徳を重視した教育が必要なのだという内容につなげることができる。それを踏まえればおおよそ次のようにまとめられる。

「古之君子」

・聖賢の道を謙虚に学び続け、自らの学問は完成していないと考えていた。（「学之終身、而不敢為成。」…3・4行目）

・能力がありながら地位や俸禄は（賢者を待遇するものであり、自らはそれを授かるに値しないと考えていたため）辞退し譲っていた。

「今之士」

・浅い学問に満足し、小さな功績を自慢して自らに徳があると見なしている。（「所習者～而肆然以為高。」…4～6行目）

・高い地位をひたすらに求め、きわめて貪欲である。（「其望乎上、非過深乎。」…8・9行目など）

以上をコンパクトにまとめ、比較を通して浮かび上がってくる今の士人の現状から大学に求められている役割として作者が主張するところを整理するとよい。

本文解説

**第1部　あるべき姿とかけ離れた今の士人の嘆かわしい現状**

**（～7行目「所辞譲而不肯居者也。」）**

書き下し

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

士たるの患ひは、常に自ら処ること太だ浅くして、上を望むこと過だ深きに在り。聖賢の道は至大なり。其の全きは以て天下を治め風俗を変ずべくして、其の緒余、猶ほ以て一官を守り、一郷を化するに足る。止小材曲芸のみには非ざるなり。故に古の君子は、之を学ぶこと終身なるも、敢へて成ると為さず。材用に周きも、敢へて以て能くすと為さず。今の士は然らず。習ふ所の者、未だ剽窃誦説の間を脱せざるも、充ちて以て足れりと為す。能くする所の者は、室家隣里の近きに過ぎざるも、肆然として以て高しと為す。聖賢より之を観れば、何ぞ其れ浅きや。上の爵禄は、賢者を待つ所以にして、固より古の君子の辞譲して居るを肯んぜざる所の者なり。

**現代語訳**

士人の病気は、常に自らを律することに甘く浅はかであるのに、上の地位を望む心が非常に深いことである。聖賢の道はこの上なく長大である。そのすべてによって世の中を治め風俗を変えることができ、残りの力でなお一官職を全うし、一つの集落を教化するだけのことはできる。ただ小さな才能や技能をもっているだけではない。だから昔の君子は一生学び続けるが、決して自身では完成したとは考えていなかった。才能は広く通用するものであったが、決して自身では能力があるとは考えていなかった。今の士人はそうではない。習ったことはまだ人のものを取ってきて自分の考えのように読んだり説いたりしたことにすぎないのに、満足して十分だと考えてしまう。影響をあたえていることも、せいぜい近隣や隣の里までの範囲にすぎないのに評判をほしいままにして徳が高いのだと考えてしまう。聖賢からこれを見れば、なんと浅はかなことだろう。お上があたえる爵禄は賢者を待遇するためのものであって、そもそも昔の君子が辞退して譲り、その地位にいることをよしとしないものであった。

## 第2部　優秀な士人が育たない問題点と大学に求められる役割

（7行目「今之士即以為」～）

**書き下し**

今の士は則ち以為へらく、分之宜しく得べしと。卑きに処りては則ち崇きを覬ひ、外に仕へては則ち内を希む。怨訐して悲戚し、勢取して力求す。其の上を望むこと、過だ深きに非ざるや。上の育才に労して、功少きを病む所以なり。然れども亦た故有り。鄙は求むる所より生じ、貪は用ふる所より生ず。之を求めて其の道を尽くせば、則ち鄙なる者も化すべし。之を用ふること其の才に当たれば、則ち貪なる者も消ゆるべし。今の成均は、才を育つるの地なり。才の美なる者を得て、之を用ひんと欲せば、二者を舎てて奚をか先にせん。士は惟だ道徳を慕ふの志有りて、然る後に以て大任に当たるべし。富貴を軽んずるの心有りて、然る後に以て大功を成すべし。

**現代語訳**

（だから）今の士人は思うに分をわきまえるべきである。低い地位にいるならば高い地位につくことを願い、宮廷の外に仕えているならば宮廷の中で仕えることを望む。自らの低い身分を怨み嘆き、悲しみ傷み、力任せに身分を得てさらに上の身分を無理に求める。高い地位を望む思いは非常に深いのではないだろうか。（それは）お上が教育に苦心してもその成果が少ないのを悩む原因である。しかしまたそれにも理由がある。卑しさは（士人に）何を求めるかによって生じ、富貴への貪欲さは（士人を）どう用いるかによって生じる。（お上が）士人に道徳心を尽くすように求めれば、卑しい者も教化されていくだろう。（お上が）士人をその人の才能に応じて用いれば、富貴に対して貪欲な者も自然と消えていくだろう。今の大学は才能を育てる場

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

所である。才能の魅力的な者を得て用いようとするならば、この二つのもの（＝卑しさと貪欲さ）を捨てて何を優先させればよいのだろうか。士人はただ道徳を尊重する心をもつようにし、そうして初めて大役を担うべきである。富貴を重視しないような心をもち、そうして初めて大きな功績を成し遂げることができるだろう。

**要旨**

昔の君子が聖賢の道を謙虚に生涯学び、能力がありながら高い地位にとどまることを辞退したのに対し、今の士人は大した学問も人徳もないのにひたすらに高い地位や俸禄を求めているため、優秀な人材が育たない。だから、今の大学は真に優秀な人材を育てるために、富貴にこだわらない心と、道徳を重視した教育を行うべきである。（150字）

**【参考】中国史における「士」**

中国における支配階層や教養を備えた人士を指す「士」の起源は古代の封建時代にまでさかのぼり、いわゆる科挙官僚を指す「士大夫」の起源もそこにある。ここではとくに「士大夫」が形成された宋代から、本文が書かれた明代、その後の時代において「士」の果たした役割の移り変わりについて見ていきたい。

〇士大夫の形成

唐末の安史の乱後、科挙官僚が次第に力をつけ、経済的地盤であった荘園を失った貴族は没落していく。その後の五代の戦乱の中で権力を握っていたのは塩賊や北方遊牧民に出自する軍閥の軍人が大半であったが、彼らの軍事警察力のもとで実質的に政務を取り仕切っていたのは新興地主階級の文人であり、ここから北宋における士大夫の形成へとつながっていく。

北宋を樹立した趙匡胤（太祖）は、五代の武断主義の反省から科挙を大幅に強化し、文治政策を定めた。それまで一回につき十人ほどであった科挙及第者が、太祖時代に数百人まで増やされ、これら科挙官僚は三代真宗期から実質的に朝廷を主導し始める。士大夫にはおもに三つの性格があり、政治的には科挙に合格した上級官僚であり、経済的には新興地主（形勢戸）であることが多く、文化的には儒教的教養を身につけた「読書人」であり、特に宋学（朱子学）の担い手として思想・学問に大きな影響を及ぼした。

〇士大夫のその後

その後も元を除いて士大夫が政権の中枢を担ってきた。明から清にかけて、士大夫が新たに郷紳という階級を形成し始める。郷紳は基本的には士大夫と同じであるが、より地方での権力者としての意味合いが強調された語である。中には私兵をもつものもおり、曾国藩・李鴻章らの湘軍・淮軍などは、清王朝後期の堕落した正規軍に代わって内憂外患に対処できるほどの実力を備えた。郷紳は、科挙が廃止されたあとの中華民国でも勢力を保持したが、中華人民共和国が成立して消滅した。しかし、現代中国においても、士大夫の意識は残っているとされ、中国共産党のエリ

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。

ートは、現代の士大夫と見なされることが多いとされる。

（関信成、若杉柊志、松野貴大）

©Foresight Inc.
本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は
株式会社フォーサイトに帰属し，無断転載・引用を禁止します。